

別紙様式3

平成29年度 第3回 地域連携による活力ある学校づくり推進協議会 議事要旨

日 時	平成30年2月7日(水) 15:10~16:20
場 所	吉城高等学校 会議室
出席者 (敬称略)	<p>布俣 正也 岐阜県議会議員 都竹 淳也 飛騨市長 清水 貢 飛騨市教育委員会 教育長代理 向川原眞郷 古川中学校長 三橋 浩之 国府中学校長 田中 晶洋 ブライトスタッフ(株) 代表 渡辺 正憲 (株) 飛騨ダイカスト代表取締役 岡山 正喜 アルプス薬品工業(株) 取締役総務部長、飛騨 City 人材会議監事 松場 慎吾 合同会社 hidaiyo 共同オーナー 関口 祐太 キャリア教育コーディネーター 川上 佳洋 「夢のたまご塾」飛騨アカデミー実行委員長 仲島 豊 吉城高校育友会長 石原 典子 学校評議員(民政委員・主任児童委員) 稲葉 佳代 学校評議員(主婦) 後藤 洋平 学校評議員(青年会議所理事) 洞 宏樹 学校評議員(卒業生の保護者)</p> <p>以下、学校関係者 鈴木 健 吉城高等学校 校長 細江 雅紀 同 教頭 秋月 正幸 同 事務長 下嶋 和長 同 生徒指導主事(記録) 小原 誠 同 教務主任 藤守 学 同 進路指導主事 堀 貴雄 岐阜県教育委員会教育総務課 教育主管</p>
議事概要	<p>※YCK(吉高地域キラメキ)プロジェクト発表会 参観</p> <p>1. 学校長より報告 今年度の取組、前回の委員の意見に対する取組や改善策、今後の方向性について説明。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H30年度入試から30人学級が実現(学級数は維持) ・岐阜県版SSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定を受け、来年度から理数科を中心に取り組んでいく予定 ・YCKについては今後カリキュラムの中でも活動時間を確保したい ・単位制について、平成31年度以降の実施に向けて検討中 <p>2. YCKプロジェクトを中心とする取組について <評価される点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表会に参加して、生徒にはこんなにも素晴らしい力があるのだと感心した。 ・自分が生徒だった時と比べて、今の生徒には自主性が感じられた。今後の活動が楽しみである。高校生の方にも街づくりにも参加してもらいたい。青年会議所としても、高校生が参加できる企画を考えたい。

- ・自主的に活動している姿を見て生徒に「甲斐性がある」と感じた。地域の住人として協力できることがあれば協力したいと感じた。
- ・生徒が企画して、課題を見つけそれを解決していくというプロジェクトを見て感心した。
- ・吉城高校生が地域に出て行って、主体的に活動している姿を知って大変感心した。
- ・企業では問題解決能力が特に大切である。YCKの活動はまさにその力を育てている。この活動が続けることで、将来的に素晴らしい人材が育つと期待する。
- ・素晴らしい発表だった。今度は地域が吉城高校のために何かしてやりたいと思えるようになるといい。
- ・YCKを通して成功体験をしたと思う。成功体験のある生徒とない生徒の差は大きい。吉城高校全体として底上げを期待したい。YCKが生徒の心に火をつける活動である。発見を与える場になるとよい。
- ・中学生にも見せたいという思いが強くなった。
- ・高校生が地域で自発的に活動している姿に感銘を受けた。最初は英語観光案内ボランティアから始まったと認識しているが、色々な可能性を広げつつあると感じた。市長がパネリストとしてステージに上がって話をされる活動にまで発展している。生徒が自分の可能性を広げつつあると感じた。
- ・YCKの活動を通して、近くでリーダーの成長を目近に見させてもらえた。舞台裏で一生懸命練習する姿を見たり、以前は小さい声だったのに今ではステージの上で堂々と話したりする姿を目の当たりにして、先生方の苦勞と喜びを感じることができた。
- ・ラーニング、アクション、フォローの三段階をうまく使いながら活動をしていた。生徒は達成感を感じたのではないか。学校の外へ出た学びには、地域教育力が必要であり、例えば、インターンシップ、外部活力導入支援などがある。しかし、YCKは更に別のよさもある。それは、学校の外へ出て自ら課題を発見して、解決していく点である。もちろん地域の方々に支援をいただいているが、この一連の活動を体験できることは、学びとして素晴らしいことである。

<改善すべき点>

- ・携わった生徒はたくさんいると思うが、もっと全校の生徒に広まって、自ら参加するようになるとさらによい企画になるのではないか。そうすると、もっと深く地域とつながると思う。飛騨市に限らず高山市にも広がっていくと、飛騨地区全体に吉城高校のよさが伝わっていくだろうと感じた。
- ・YCKは基本的にはボランティアの発表であるが、課題の考察の部分がもっとあるとよかった。例えば、地域にもっとこんなことができるとよかったとか、自分たちが活動を通して出てきた課題などをもっと発表してもらえるとよかった。
- ・今後、吉城高校のどの生徒も参加して、全員がYCKに進んで携わる体制ができ、どの生徒もYCKを語れると素晴らしいと思う。
- ・地域と関わって活動しているにも関わらず、まだまだ地域の方は知らない。もっと地域に積極的に発信してもよいのではないか。

<その他>

- ・YCKは今一番、求められている教育プロジェクトである。今の時代、自分で考え、自分で解決していく力が求められている。しかし、どこで学べるのかと考えると意外と少ない。この力は人生を拓いていくための力だと考えると、やはり学校教育が中心となって補っていく部分ではないか。実は、飛騨市自体もYCKプロジェクトと同じであり、問題は山積みで、それをいかに解決するか、予算を立てて問題を解決しようとしている。YCKの活動を通して、生徒たちに自分たちの町の課題を知ってもらうことが、ゆくゆくは自分の町へ将来戻ってくるきっかけにもなる。吉城高校の活動は飛騨地域の中では突出していると自負している。YCKの生徒たちだけでなく、先生達も地域に飛び出すことも大切だと感じる。

- ・地域の課題の解決だけでなく、自分たちの目の前にある問題を解決していくことも、いい学びにつながる。このプロジェクトが一部の生徒だけの活動ではなく、「吉城高校では当たり前です。」と全生徒が自信をもって言える活動に位置付けていただきたい。中学校と高校の間でオープンな連携をお願いしたい。

3. まとめ

<学校長より>

- ・YCKの活動を通して語れる財産を個々の生徒が作っていき、新大学入試制度で重要視される課題解決能力を身に付け、面接・小論文など進学にも役立てることができる。
- ・今後は同じ飛騨市の高校として、飛騨神岡高校とも連携を図りながら、高山地域へも広げることを検討していきたい。

<教育総務課より>

- ・生徒の表情が大変よいと感じた。生徒が大事にされている。何かにチャレンジし、うまくいってもいなくてもきちんと評価され、認められているという印象を受けた。キャリア教育とは答えは一つではない。子どもたちにとってよい教育環境を作っていて欲しい。地域の皆様には、来年度以降も協力をお願いしたい。